まとめと今後の展望

SUMMARY AND FUTURE PROSPECTS

まとめと今後の展望

令和５年度は、「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(3) 地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」と題して、学際的な共同研究事業をすすめ、下記の３点の成果を得ることができた。

第１点として、千代田区における過去の自然災害記録の教材化とワークショップの実施である。今年は、関東大震災（1923 年）が発生してちょうど 100 年目にあたることから、震災時の千代田区における証言・映像の収集と分析を行った。具体的には、『大正大震災大火災』（大日本雄弁会講談社、1923 年)、『東京市立小學校兒童震災記念文集』(東京市学務課、1924 年）など、当時発行された文献の中から千代田区域に関連する内容を抽出し、分析を行った。さらに、国立映画アーカイブ所蔵の映像（関東大震災映像デジタルアーカイブ：https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/）から千代田区域に関連するものを抽出し、文献や震災絵葉書との照合、分析などを行った。これらの成果を公表するために、「企画展「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」の開催や、千代田区域における関東大震災の古写真（絵はがき）を収集した「関東大震災 100 年」パネル展示を実施した。開催にあたっては、学生による展示プロジェクトチームを結成したことが、展覧会の企画・立案から実施までが防災意識の育成につながったと考えらえる。

こうした千代田区の過去の災害を基に、ウィキペディア記事執筆ワークショップも実施された。災害についての学びの機会を生み出していくことを狙ってきた。今回は、特定の場所や建物ではなく、「神田の大火」という広範な影響を巻き起こした災害という事柄を対象とし、「神田の大火」で焼失した範囲を 1 時間弱の時間をかけて、延々と焼失範囲に沿って歩くという経験ができた。これは、「災害」による影響を再確認すると同時に、日本の近代化というとても大きな歴史的文脈を垣間見ることができた。「神田の大火」という大きな看板の影で、実際に被害を受け、右往左往しながらも復興のために動いていった生きた人間の存在に気づき、想像力を養う機会となった。

第２点としては、防災に必要な情報・備蓄品等のアーカイブ化をすすめることができたことである。学生が「災害時の栄養・食生活に備える」防災教育の視点を盛り込んだ栄養教育の実践力を養うための動画教材を作成した。その動画コンテンツの分析から、若年成人の視点からの動画のニーズを分析することができた。その内容みると、一般家庭を対象としたものもあったが、妊婦・授乳婦、乳幼児をもつ親、そして高齢者等の要配慮者、食物アレルギーをもつ方も視野にいれて作成されており、こうした方が自主的に防災・減災のための対策をするためにも、また、帰宅困難者となり一時滞在施設として支援をするためにも、動画等での情報提供の必要性が提示された。

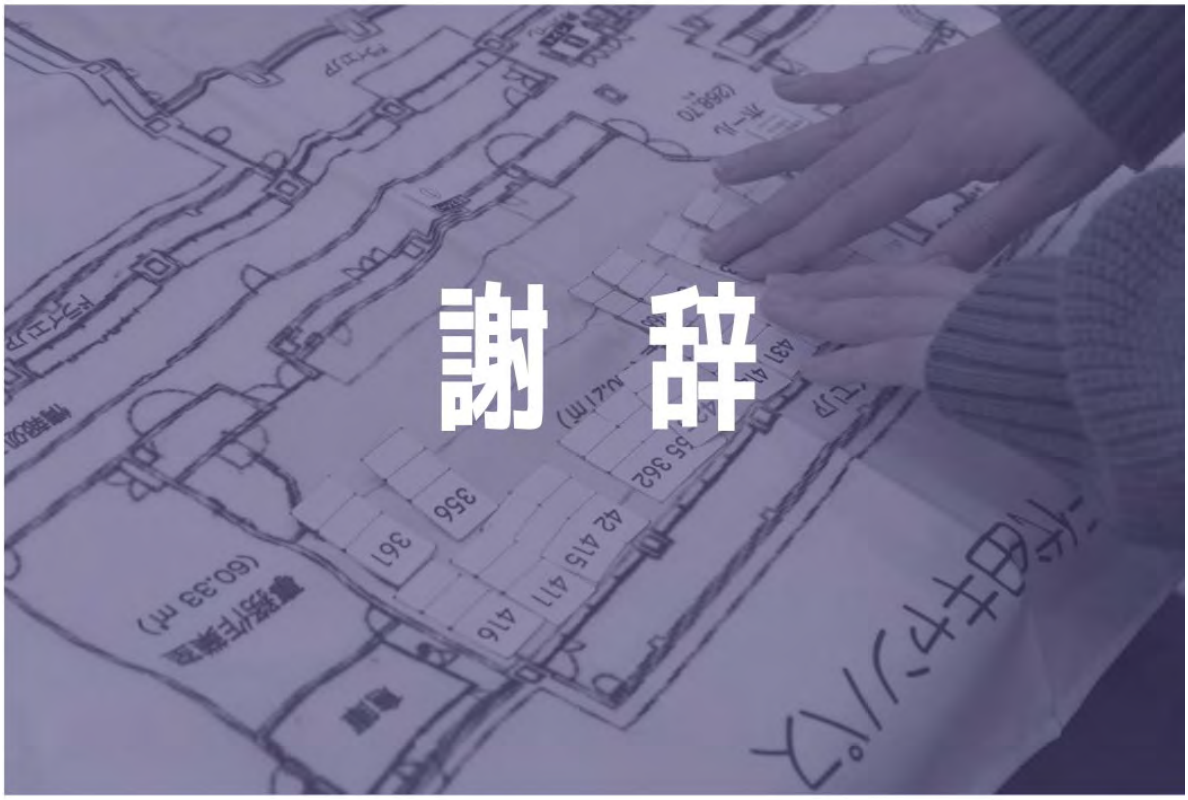
さらに、災害時に役立つ簡単クッキング方法も検討された。備蓄食品を用いてなるべく多くの食品を摂取できるような料理を考案し、15 品の料理について学生実習を行い、実習前後のアンケート調査により備蓄食品に対する意識の変容が調べられた。備蓄食品を用いた 15 品の料理を考え学生実習を行った結果、実習後には、米（精白米・無洗米)、乾麺（そうめん・うどん・パスタ）を備蓄するという割合が増加し、特に乾物（切り干し大根・わかめ等）は 90%と実習前の９倍になり、米や乾麺、乾物等を備蓄して料理するという意識が高まり、備蓄する食品や備蓄食品に対する意識に変容がみられた。災害時の食事については、平時より災害時の栄養・

食生活の基本等について情報を得て、防災意識を醸成しておくことが大切であり、ローリングストックなど教育現場において災害時の視点から見た食教育を行うことは、被災時の食を支える上で重要であることが示され、伝承の重要性が再認識された。

第３点としては、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（ＫＵＧ）を、地域と連携しながら、５大学において開発・実施することができた。一例として、法政大学では、帰宅困難者一時滞在施設に関する問題の解決に資する提言を学生が主体的にまとめることを目的に、災害発生時をシミュレーションしたキャンパス施設内での宿泊体験実習（＝防災キャンプ）、およびＫＵＧを通じた帰宅困難者一時滞在施設を運営するための改善策を検討するプロジェクト活動ができた。一時滞在施設の「運営者側の立場」と「帰宅困難者である利用者の立場」という二つの異なる観点から見えてくる問題や、「学生としての帰宅困難者の立場（講義中の教室や学内施設における過ごし方）」と「学外者としての帰宅困難者の立場（本学の市ヶ谷総合体育館における所定の場所での過ごし方」の違いなどから生じる多岐にわたる問題に対して、グループワークを通じて段階的に取り組み、対処していた。学生は、これらの問題に付随して予測される問題が広大無辺に広がっていくことも認識しつつ、それらの問題に取り組んだ結果として、複眼的な目を養う効果を得られたことが期待された。さらに、これらの成果から、帰宅困難者一時滞在施設の受入れに備えたアクションが作成された。その内容は「緊急地震速報が鳴った時の対応」、「揺れが収まってからの対応」では①帰宅困難者の受入れ準備の発令、②帰宅困難者の受入れ基本方針の確認、③帰宅困難者の受入れ直前、④帰宅困難者の受入れ開始の段階ごとに提案されている。

以上、今年度、それぞれの大学で、千代田区の地域組織・団体と交流を深め、ＫＵＧを防災教育の質的向上に資する教材として活用できたことが、学生ボランティアとして避難施設の運営に携わることになった場合の心構えや対応力を養成することにもつながったと捉えられた。３年間を通して、学生は多様な避難者および避難所で生じる問題を想定し、臨機応変に対応することの困難さを自分事に置き換え、防災行動に対する複眼的な目を養うことでサスティナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を学生とともに探求することができたことが大きな成果である。

次年度、令和６年度も千代田学の共同提案事業として、千代田区キャンパスコンソにおいて研究を深めていくことを計画している。千代田区キャンパスコンソでの単位互換科目として、「課題解決型フィールドワーク～大規模災害自然発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントＩ－千代田キャンパスコンソ及び近隣企業との連携」を開設し、各大学から受講生を募ることで学生災害ボランティアの育成をすすめることを計画している。学生は①大規模自然災害に関する知識を深める、②与えられた課題に対するグループワークによる実習及び演習を中心に、積極的なコミュニケーションを通して、想定される多様な避難者、および、避難所で生じる問題に対して臨機応変に対応することの難しさを共に学び、防災行動に対する複眼的な目を養うことを到達目標としたい。教育内容については、各大学の研究者が参画すると共に、千代田区・災害救援ボランティア推進員会、千代田区社会福祉協議会、一般社団法人防災教育普及協会、および地域の関係団体、企業等と連携しながら、構築する。その一部には、令和５年度まで研究をすすめてきた各大学のＫＵＧを活用した学習や、研究により得られた知見や解決した問題点などの資料（動画等）を活用していく。各段階で、千代田区の危機管理政策経営担当部門に提供したい。



謝　辞

本研究におきましては、令和３年～５年の３年間にわたり、千代田区より助成を頂き、研究活動が出来ましたことに深く感謝いたしております。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員のお互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これからを生きていくことへの期待と挑戦となっていくことでしょう。同時に、本研究を通して、千代田区キャンパスコンソの活動自体を強化することができたことも財産となっています。

本研究を進めるにあたり、千代田地域振興部コミュニティ総務課、政策経営部災害対策・危機管理課、千代田保健所健康推進課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。

今後も千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）の活動にご支援・ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

（研究総括・酒井治子）

執 筆 者（50 音順）

伊藤　マモル　法政大学 法学部 教授
（第４章 第１節・第２節）
近藤　壮　　共立女子大学 文芸学部 准教授
（第２章 第１節、第４章 第５節）
酒井　治子　　東京家政学院大学 人間栄養学部 教授
（第１章、第３章 第１節、第４章 第３節、まとめと今後の展望）
下坂　智惠　　大妻女子大学 短期大学部 家政科 教授
（第３章 第２節）
谷島　貫太　　二松学舎大学 文学部 准教授
（第２章 第２節、第４章 第４節）
堀　洋元　　大妻女子大学 人間関係学部 准教授
（第４章 第６節・第７節）

（所属は 2024 年 3 月現在）

令和5年度　「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 共同事業

自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究
(3)地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発
報告書

令和６年（2024）３月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）」
幹事校　東京家政学院大学　人間栄養学部　酒井治子
〒102-8341　東京都千代田区三番町 22 番地
Tel：03-3262-2251

千代田区キャンパスコンソ

Chiyoda Campus Consortium